早期発見・早期治療につきる―最新の胃がん療法について。

2006年度日本胃癌学会会長を務め、前に愛知県がんセンターに勤務され、現在は名古屋記念病院外科系特別顧問の山村義孝先生に、がん患者数が日本で1位の胃がんについて最新の医療情報をお聞きしました。

名古屋記念病院 外科系特別顧問　山村 義孝 先生

■先生が会長として開催された2007年3月の日本胃癌学会総会で、以降の胃がん治療に大きな影響を与え、今日の胃がん治療の基礎となった重要な臨床の研究結果が公表されたとお聞きしました。

●はい、そうです。胃がん治療の転換点になった総会の会長を務めることができたのは幸運だったと思います。

胃がんの治療法は大きく分けて患部を手術で切って取るか、薬で治すかということになります。切って治すにも普通の開腹手術と腹腔鏡による手術、内視鏡による粘膜切除の3通りがあります。

胃切除するときには周辺のリンパ節も摘出（郭清）しますが、そのリンパ節郭清の標準的な範囲が決まっていませんでした。1990年前後から大動脈周囲のリンパ節までをきれいに取る拡大郭清が行われるようになりました。リンパ節を広範囲に郭清すれば再発が減らせるかも知れないと考えられたからです。それで、従来から標準的に行われていた胃に近い2群までのリンパ節を郭清する方法と拡大郭清とを比較する試験を、厚生労働省支援の共同臨床研究グループで取り組みました。その結果、拡大郭清は出血量や手術時間が長いにもかかわらず、生存率は2群までの郭清とまったく同じでした。そのため、予防的な意味での拡大郭清は無効であり、2群までの郭清がスタンダードだと結論され、医学の分野では世界最高峰のThe NEW ENGLAND JOURNAL of MEDICINE誌に掲載されました。リンパ節郭清のスタンダードが決まったということです。

それともう一つ。手術後に再発防止という目的で抗がん剤が使われたこともありましたが、その有効性が客観的に証明されたデータがまったくなかったため、手術後は薬を使わないで経過観察するのがスタンダードでした。しかし、TS-1という飲み薬を使った客観的な試験が行われ、これが再発防止に有効であるとの結果もこの総会で報告されました。その内容がまたNEW ENGLAND JOURNAL誌に載ったのです。これにてTS-1を用いた術後補助化学療法が再発防止に有効であることが初めて認められました。

その学会総会以降、胃がん治療のガイドラインが変更になり、手術は2群までの郭清がスタンダード、抗がん剤は手術後1年間のTS-1の内服がスタンダードと決まりました。

■胃がんの治療で最新のテーマはどんなことですか。

●今一番のテーマは、病気の進行度に応じた治療ということですね。

胃がん治療の基本は手術です。早期がんでいろいろな条件をクリアーできれば内視鏡による切除が可能です。がんの大きさによって二つの方法がありますが、いずれも胃カメラで見ながら周囲の粘膜ごとがんを削り取る方法です。この方法は、開腹する必要がなく、すぐに治りますし、胃は元の大きさのままですので、食事などのQOLが良くて患者さんの負担が軽い治療です。

内視鏡治療の条件から外れますと手術が必要になります。手術には、腹腔鏡を用いる方法と通常の開腹による手術とがあります。両手術とも胃の切除などの治療内容は全く同じですが、腹腔鏡による手術はお腹に開けた数個の孔からカメラやメスを入れ、モニターを見ながら手術を行います。手術の傷跡が小さいため患者さんの評価が高く、技術的にも大きく進歩し普及しつつあります。しかし、まだ長期のデータが出ていませんので、現時点では腹腔鏡手術はオプションであり、スタンダードは開腹手術ということになります。

■胃がんで亡くなる方はトップではありませんね。

●胃がんの発生率はピロリ菌感染の減少や食生活の変化などで減りつつありますが、高齢化の進行のため実際の患者さんの数には変化がありません。ここ数十年は年間10万人が胃がんにかかられ、5万人が亡くなられています。亡くなられる方の数では死亡率の高い肺がんに次いで2位ですが、患者さんの数では未だ1位です。

■胃がんは治ると考えてよろしいか。

●はい。しかし、それも進行度によります。早期がんで見つかれば、ほとんど治ると考えてよいでしょう。胃がんに特有な臨床症状はありません。吐き気や胃もたれ、しこりを触れるなどの症状は、がんがかなり進んでから現れることが多く、早期がんは無症状のことが多いようです。

■先生が一般の方に一番アピールしたいことは。

●胃がんは早期に見つかれば治ると考えてよいと思います。しかし、ある一定の限度を超えると今でも治りにくい病気であることに違いはありません。早期発見・早期治療こそが胃がん治療の原則です。検診で「異常なし」と言われても、翌年見つかることがあります。毎年必ず検査を受けること、それに尽きるのではないでしょうか。